

## 練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第2回）「体力の向上」部会 要点録

開催日時	平成 21 年 7 月 10 日(金) 午後 3 時 30 分～午後 5 時 30 分	
会 場	練馬区役所東庁舎 3 階 301 会議室	
出席者	委 員	米津光治、赤木宏行、杉原 昇、宮野いずみ、工藤智昭 難波武雄、畑 陽子、(敬称略)
	その他	教育出版
	事務局	渡辺浩一 指導主事

### 事務局

前回第 1 回で確認した、今後の小中一貫教育における体力向上をどこに視点を当てていくかを前提に、本日は各校における体力向上、また体育の実践、取り組み、実態を把握していきたい。

前回米津先生より、体力の数値よりも生涯にわたって体力、健康等に関心を持ていくか。それと体力向上がどうかかわっていくかというところの視点が非常に大切ではないかという助言をいただいた。それを踏まえ、小中の取り組みの差、違い、段差をどう解消していくか、どのように取り組みを持っていくかにつなげるために、現段階の取り組みについて、意見をいただきたい。

### 委員

ここで 2 年かけて指導計画をつくっても、2 年後の指導計画ではうちの教育課程には間に合わないということを、最初に申し上げておきたい。

体力の向上から離れてしまうが、今年度中に行われるのが小中合同の道徳授業地区公開講座、ホームページの作成、子供の委員会活動、避難訓練。小学校高学年の部活動の参加。中学校の先生方による出前授業。小学校の高学年に向けた中学校の職場体験の報告会、合同の書き初め展や、展覧会の話が出ている。来年度については、時程や学校行事、教育課程、生活指導に関することで小中の指導方針を一本化し、共通理解をするという話。それから、学力向上、教科担任制をどうするのか等について、ここの部会が関わる部分。一般的なもの、望ましいかたちをつくるというのは分かるが、うちの学校としては余裕がないので、何か手伝ってもらえるのかという正直な感想がある。

大泉学園の桜小中は、来年同じ年度に 30 周年を迎えるので、それと合わせて小中合同の運動会ができたという話をしている。

桜小学校では体育朝会の時間を使って、いろいろな運動オリエンテーリングをやっている。例えば遊具を使った運動や、バスケットボールのシュートなど。それから、12 月ぐらいにはマラソン大会を予定している。

#### 委員

うちは大規模校なので、施設面で足りないところがある。組織的には体育部、体育行事委員会があり、そこでスポーツテスト、運動能力テストを分析し、傾向を考えながらなわとびやマラソン大会を計画している。難しい点として、体育の授業の規模、内容等が制限されている。体育用具、施設面で不備があるということで、充実したものができない。授業の質として、体育専門の教員は高学年に関わることが多いので、低学年の体育の授業が非常にソフトな感じ。低学年で充実した楽しさと運動経験、感覚づくりをやらせておくと高学年でも授業が広がり、運動好きが増えると思うが、逆な面が見えていた。この辺が学校の中での課題だと思っている。

もう一つは、計画を継続させることが非常に難しい。行事関係で、単元が未消化で終わったりと、ねらいとしたことが施設面や日程面でできないことが反省として挙がっている。体力テストを見ながら分析をしていると、未経験や経験不足などが原因として見えてきているので、それを解消させるための取り組みをできるところからやっていこうという話し合いは出ている。

#### 委員

田柄中では体育の時間にトレーニングからスタートする。内容は、腹筋と背筋と腕立て伏せ、スクワット、ランニング。それを終えてから主の競技、または授業に入っていくということを体育の授業の一つの流れとして行なっている。

今年からは平成 23 年度の学習指導要領のダンス、または武道を男女共修していこうということになり、男子にダンスを女子に武道を新しく試みていることである。

#### 委員

私は教員にアンケートをとった。教師から見た児童の実態としては、体力がないととらえている教員が多い。子供たちに足りない力として持久力と柔軟性が特に挙げられていて、運動量がある学習内容を入れたり、マラソンやなわとび等を組み込んだ学習内容を工夫したり、準備運動の中、または「体づくり」の中で柔軟性を高める運動を毎回入れていくという活動をしている。

専門的な知識を持った教員が少ないので、児童が本当の運動の楽しさを十分に味わってない実態もある。また、個人差が大きい運動領域に関して、指導が難しいと感じている教員が多い。本校では今年度、スポーツ教育推進校ということで、体育講師を取り T・T で授業をやっている。先生たちの意識も高まったかと思う。校内研究では、認め合い高め合いということに焦点を当て、とにかく運動の楽しさを味わわせていくことを重点にやっている。併せて、実技研をその都度行い、指導のポイントを教師自らが体験することで適切な指導ができ、児童の体力向上につなげるために実践している。

体力向上の取り組みでは、マラソン月間を1月の中旬から2月の中旬に、なわとび月間を11月から12月にかけて、朝の休み時間を活用して取り組んでいる。

#### 委員

子供たちが、体を動かす時間を確保するために、20分休みや、朝の集会、朝会で、全校で取

り組む活動等をやっていたり、その学校の体育施設をどう有効活用を図っていくのかという取り組み、また仲間づくりのために学級全員で遊ぶ日や、縦割りで異学年と一緒に遊ぶなど、それぞれ学校なりに工夫して体力づくりに取り組んでいる。

その取り組みから体力の向上が目に見えて表れない要因に、一つは指導者が大きいかと思う。特に小学校のほうは体育指導について苦手な教員もいる。さらに本当は体育をやって体力の向上に取り組みたいと思っても、課題が多く取り組めないという現状がある。学校だけで体力づくりというのは限界があり、家庭や地域とネットワークを組みながら子供たちの体力向上に向けて、総合的な体力づくりを推進していくことを考えないと難しい。

## 部長

小中の体育指導の段差は、一体どこから考えられるのか。中学校は、教科担任制で体育指導の専門教員がすべている。小学校の体育の授業、体力づくりは専門性のない先生は不得手とするところがあり、担当する先生によって子供たちの運動に対する好き嫌いが表面化してくる部分もあるのかもしれない。中学校の体育の場合には、年間計画を見ても競技スポーツの中で子供たちに興味・関心を持たせて、体力的なものをつけさせていくことが実態である。例えば本校でも運動の部活動に所属し、専門的なスポーツ活動によって体力がついていることは否定できない。

今は小学校の子供たちも、低学年から地域のスポーツ団体に所属して運動に親しんでいるという子供たちがかなり多くなってきているが、片や、小学校のときに経験していない子供たちとの体力の差は非常に大きく出てきている。だから学校の体育だけの体力ではなく、部活動や地域のサークル活動の実態も捉え、体力を見据えていかなければいけないと思っている。

結局小中一貫教育の中で、先生たちが課題点をどんどん出し合ってⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期と組み上げていかなければいけないのではないかな。一番の注目点はⅡ期だと思う。小学校の低学年は、とにかく運動嫌いにさせない工夫と運動に親しむ楽しさを教えていくべきだと思う。Ⅱ期の辺りは運動の特性を十分に教えながら、運動を好きになっていくような指導の課程。Ⅲ期のほうは運動種目の特性を十分生かしながら、さらに発展させるようなスポーツ競技として展開させるような雰囲気づくりというものをつくっていくのだろう。その中で体力は、子供たちが本当に毎回汗をかくような体育の授業をしていれば、特別に体力の指導をしなくても、おのずと体力はついてくるのだと思う。

練馬区の体力的な課題は注目しなくてはならない。いま何が必要なのか焦点化していくべきだろう。それをⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期でどのように捉えるかということもこの中に入れておくべきではないか。

## アドバイザー

一つ確認しなくてはならないのが、そもそも体力をどうとらえていくか。区としては子供たちの育てたい体力としては二つ。要するに運動するための体力と、健康にするための体力ということ。そうすると、この部会として両方を扱うのか、あるいはどちらかに特化するのか、絞りこまないと資料として作成しにくい。もう一つ、体力の問題は個別の問題であり、それを区

として指導資料を作るならば、整合性を取らなければいけないだろう。

それから、運動するための体力だけではなく、健康に生活するための体力としてのねらいはどこにあるのか。ここはⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期の中でそれぞれ押さえておかななくてはならないと思う。

そのねらいが確定した後で、具体的なプログラムなり方策に進んでいくと思うのだが、そもそも教育活動の中のどこで取り組んでいくのか。体育、保健体育という教科が中心に、どこまでカバーするのか。体力向上に取り組むための時間や機会をどうすみ分けしていくのかが、これから課題になるかと思う。

これからの課題として、部活動にいつから参加させるか、小5から認めるのかということも含め、検討資料等をここにご提供いただき、意見交換をする中で、お互いに精度を高めていくことがとても大事になるのではないかと。一つは客観的なデータに基づいた中での指導資料というものも必要だし、もう一つは、先生方が目の前の子供たちを見たときの主観、長年の経験の中で感じられていることを、どう拾って指導資料をつくっていくのか。

「体育指導を行う上で指導しにくい運動領域」を見ると、決まった動きがない運動が指導しにくい。先生方が指導しにくいと思っているのは教科書のない部分。体づくり運動や運動遊びのような基本の運動は、決まった運動はないわけで、だから指導がしにくい。先ほど、教師の指導力の問題があったが、そこに答えていくような指導資料というものも、意味があると思う。これをどう絞り込んでいくのかが次回以降の課題になるのではないかと。

#### 事務局

練馬区としては、運動するための体力と、健康に生活するための体力。この二つをもって体力という位置付けをしている。

#### 委員

まず考えるときに、各学年に指導要領に示された内容でやっていく学校であるということ。次に、Ⅱ期の指導の持っていく方。男女共修をいつまで取り入れるのか。選択性をどうするのか。いつから教科担任制を取り入れるのか。取り入れるとすれば、どんな運動種目が適切なのか。全部は取り入れられないと思うので、突き詰めていかないと指導計画づくりも何もできない。小学校高学年の部活動参加について。部活によってだろう。それから、子供の個々の運動経験。一番考えなくてはいけないのが、けがが一番心配であるということと、逆に中学生の足手まといにならないかという危惧があるので、その辺のところも検討していこうかというところである。

#### 部長

確かに中学校でも3年生と1年生の力量は差があるわけで、同じレベルで練習することはできない。当然、指導者は、完全に練習メニューを別個に組み立ててやっている。小学校5年生から中学校3年生まで同じ部活に所属した場合には、力量的な差がさらに広がる。指導プログラムをかなり広めに設定しなければいけないことになるだろう。けがということも懸念される

部分だが、指導者側が指導内容の幅を持たせれば、年齢差が広がっても大きな問題点はないような気がする。むしろ、力量の高い運動を見ることで刺激され、運動に対する興味・関心が強まるのではないか。

#### 委員

9月ぐらいから実行できることはどんどんやってみて、また報告をさせていただきたい。

#### 事務局

品川の小中一貫の取り組みで、部活動は小学校5年生以上の希望参加ということで実施し、年々参加率が増えてきている。5・6年生の実際に部活動に入った子供たちも入るまでは不安があったが、指導してもらえると喜び、支えられる、励まされることで先輩と仲良くなれて、自分の技術も上がっていったことは非常によかったという声も出ている。

いろいろやらなければいけないことはたくさんあるが、その中でも現場の声を反映して優先順位を立てていくと、一つは部活動。あとは出前授業か。

#### 委員

出前授業は、できれば英語や国語をやっていたきたいが、中学校の5教科の先生方がほとんど空きコマがないという状況で、小学校に出前ができない。定数を増やしてほしいが、それは都や国との問題になってくる。兼務発令をした場合に、中学校の先生は小学校を教えることができる。ただ兼務発令をされた場合に、自分の教科のものしか教えられないこともあるだろう。小学校の先生が中学の部活に参加しようかという話もあるが、「桜小は中学の部活もやる」「桜小って大変だ」ということが出てしまうのではないのかという話をしている。

#### 部長

結局、出前授業の問題にしても授業時数の問題が大きいネックになっている。定期考査等ある一定時期しかできない。週のカリキュラムの中に組み込むことは難しく、年に1、2回の定期的な短期の出前授業しかできない状態。それを定期的に組み入れるためには人的配置をしていかないと、現状的には不可能。これから校長先生方が人的配置の問題について区教委、都教委とある程度交渉しながらやっていくことが大前提になってくると思う。

#### 事務局

話を体力に戻し、具体的に動いている中で部活動があり、出前授業があったが、もう一つ大きな行事として運動会がある。品川も運動会は非常に重きを置いており、どこを特に連携付けるかが非常に大きな目玉になっている。

#### 委員

来年はできるかどうか分からないが、スケジュール的には可能なように年間行事を組もうかという話になっている。内容について、今まで最高学年として、小学校では最高のものを見せ

ていた6年生の立場はどうなるのかという意識の問題もある。

#### 事務局

特に指導しにくい運動領域に「体づくり」がある。どのように組み立てていくかが、まだ学校サイドに委ねられている。これを小中9年間の中でどう構築できるのか。桜小学校の現場の声も十分に踏まえていけたらいい。本委員会で3期に分け、具体的な運動例とか、そのときに高めていきたいねらいを示して、それを参考に今度は現場で活用していただくことも支援になることではないか。

今日の話し合いの中で、授業、行事、部活動という三つが現場の声も踏まえながら本委員会としてアプローチしていく視点になったのではないか。授業に関しても、新学習指導要領に沿った、それでいて小中一貫だからできる取り組みも今後、体系化をしていただくと現場としては非常に活用できるのではないか。

#### アドバイザー

体育や保健体育の授業という切り口でいけば、学習指導要領を踏まえたかたちで具体的な運動例を紹介したりとか、それはそんなに難しくないと思う。

例えば学校行事の運動会や部活動について、小中の一貫校として部活動に取り組むときの一つのモデルになるようなものをこの部会として提案をしていくのかどうか。

#### 部長

焦点の絞り方を、体力の向上ということで考えたときに考えられるのは、体育の授業だと思う。例えば体づくりという領域にしても、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期でどうやって組み合わせていくのか、ほかの種目の中でどうやって組み立てていくのかが、とっつきやすいと思う。

確かに体力は、体育の授業だけで構築されているのではなく、実際にはほかの部分があるものすごく大きい。特に中学校の場合には、学校行事や部活のウエートが大きいかもしれないが、今回の小中一貫の中で表現するのはなかなか難しいだろう。それならば、基本的に体育の授業を中心として見据えて、プラスアルファで体力にはこういう大切な部分があるのだから見過ごしてはいけないと、学校行事の運動会と部活動の捉え方を組み入れるほうがいいと思う。

#### 事務局

練馬区の持つ体力の課題から、小1から中3までの間で授業としての単元や、教科領域、行事等も含め、この部分でこういった向上が図れるというのを全体として体系化していく。それがやはり、この委員会としての一番のねらいではないかと思う。

#### 委員

この資料は区全体で見るとのわけである。これは普通の小、中学校でも連携を図っていかなくてはいけない問題だ。何とかこの資料で、スムーズにいく見通しを持たせるねらいもあると思う。小中で話をしてもかなり違うし、そのはざまを埋めるためにこういう資料を見てやればスムー

ズに行く。

その例として小中一貫を桜でやって、実践で指導資料を作りながら積み重ねて、こういう資料ができました、だから区でやってみてください。9年間を見通せば練馬区としての体力向上が図れるでしょうというのが、私は理想だと思う。

その意味で授業をベースにして、練馬区全体の小中の体力向上を図っていくのであれば、私は授業の底上げが必要だと思う。運動嫌いや運動が得意ではない子を底上げしていくために、授業をどうしていくか。こういう資料をつくりながら実践をし、小、中学校でうまく連携しながら9年間の体力向上が図れていくという資料が作れば理想かと思っている。授業をベースに、目標は区全体の体力の底上げ、向上をねらっていくという資料になれば。そういう視点で次回は、どのように資料の作成をしていけばいいか考えてみたらいいのかと思う。

#### 事務局

今日はそれぞれの各校の実践から、今後の課題としてどう絞り込んでいくか、どういったことに焦点化していくかというところまでご提示いただいた。

授業をベースに、その中でも特に体育指導として先生方が課題と感じている種目等がある。この辺りも含め、優先順位を立て、本委員会として支援できるような、また練馬区にも波及できるような資料というところの視点も踏まえたい。次回どこに焦点化していくかというところを、少し時間をかけながら今後の方向性を絞っていききたい。

また今日の話の内容をもとに、桜小で難波先生を窓口にしてまとめていただき、現場の先生方の声も次回反映させていければと考えている。

#### 委員

今日見通しが持てるようなプロット案を示された。一番の大本の基本的な考え方や、どういう報告書を作成していくのかをもう一度再確認しながら、8ページを具体的にまとめていくのか。その辺をまた次回の課題にしていく。それから体力向上のカリキュラム。この重視する指導項目のところ、本区の子供たちの実態を踏まえたものが入ってくると思うが、どういう内容を中に盛り込むのか、次回、お互いに知恵を出し合いながら進めていきたい。

#### 【次回日程】

第3回 7月22日(水) 15:30～ 練馬区役所本庁舎19階1905会議室とする